を前に向ける

手話に〈ぐれあい・接触〉〈濃いA〉〈〜人・〜者〉の組み合わせです。

「疑陽性」

医学などにおける検査の結果が、陽性と陰性の中間で判定できない状態のことです。例えば、過去に結核菌に感染したことの有無を調べるツベルクリン反応検査では、陽性ではないけれど、陽性に近い反応のものを「疑陽性」と判定していました。

手話は、〈疑う〉〈十・陽性〉の組み合わせです。

「偽陽性」

医学などにおける検査の結果が、本来は陰性であるのに、誤って陽性と判定されることです。検体採取や保存方法の条件などの影響で起こることがあります。

手話は、〈嘘〉〈十・陽性〉の組み合わせです。

秋の叙勲・旭日双光章

元連盟理事の西滝憲彦氏が受章

受章を喜ぶ西滝氏と妻の高子さん

2020年秋の叙勲の受章者が発表され、旭日双光章が全日本ろうあ連盟元理事の西滝憲彦氏に授与されました。コロナ禍によって伝達式等が中止されたことに伴い、昨年11月12日に連盟本部事務所で授与が行われ、厚生労働省自立支援振興室長の金原辰夫氏から西滝氏に勲記と勲章が手渡されました。

西滝氏は連盟の教育対策部長等、理事を14年間務める他、連盟の京都事務所長や大阪聴力障害者協会の副会長等を歴任。ろう運動の発展に寄与しました。

連盟京都事務所ともオンラインでつながり、連盟職員からお祝いの言葉を受けた西滝氏は、「大変栄えある章をいただき、うれしく思います。導いてくださった連盟の先輩方、理事、職員の皆様のおかげと感謝しております。私は図書館に毎日通い、今は視覚障害教育の歴史を調べています。大正4年に日本聾唖協会が設立された契機・背景を調べていますが、その前に盲人協会が先に設立されており、この盲人の運動から影響を受けた部分もあろうかと思うのです。こうした経緯も含めて100年以上の歴史のある連盟のこれからのますますの発展をお祈りします」とお礼を述べました。

インフォメーションギャップバスターに

糸賀一雄記念未来賞

障害者に関する先進的な取り組みに対して授与される「第6回糸賀一雄記念未来賞」をNPO法人インフォメーションギャップバスター（IGB）が受賞しました。

IGBがこれまで取り組んできた、電話リレーサービスの公共インフラ化、企業内のコミュニケーションバリア解消、首長会見における手話通訳・字幕付与要望等が、洗練されて現代的な手法（啓発（共助）、教育（自助）、要望（公助））であり、従来の福祉分野の取り組みにはない方法だと評価されました。

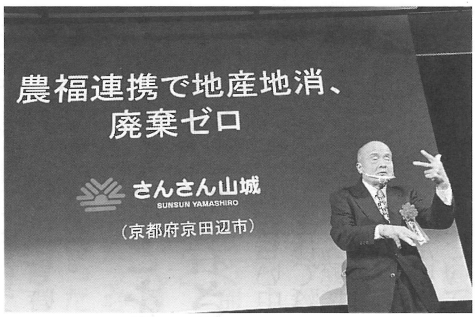
IGBは今回の受賞について「10年にわたる活動の労苦が報われ、喜ばしい限りです。支えていただいたNPO関係者の皆さまに心から感謝いたします。今後は各分野のコミュニケーションバリアフリーにさらに邁進してまいります」と述べました。

昨年11月14日の授賞式にて

さんさん山城に環境大臣賞

第8回グッドライフアワード

環境省が主催するグッドライフアワードは、環境と社会に良い活動を応援するプロジェクトで、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを「環境大臣賞」として表彰するものです。今年の第8回グッドライフアワードには193件の応募があり、実行委員会による審査の結果、京都府京田辺市にある「さんさん山城」がNPO・任意団体部門賞を受賞しました。さんさん山城では、2011年の開所以来、ろう者がやりがいを持って地域特産にこだわった農業の6次産業化を展開。JAへの出荷やカフェの運営、付加価値の高い加工品販売など、環境にやさしい廃棄ゼロ活動に取り組んできました。また、地元にある児童養護施設の子どもたちを対象とした農業体験にも取り組んでいます。



昨年12月5日の表彰式では、さんさん山城の職員でろう者の植原優さんが、この授賞式では初となる、手話でプレゼンテーションを行いました（写真上）。式終了後、植原さんは「開所準備から携わってきた地道な取り組みが評価され感慨無量です」と受賞の喜びを語りました。